

新しい認知科学に向けて：「接点」を探究する

Towards New Cognitive Science: Examinations of Interfaces

諏訪 正樹
Masaki Suwa

慶應義塾大学 環境情報学部
Faculty of Environment and Information Studies, Keio University
suwa@sfc.keio.ac.jp

概要

コンピュータ・情報技術が生活のあらゆるシーンに導入されつつある現代において、人と人の「接点」、人と技術の「接点」を探究することは、新しいチャレンジである。「接点」で生じるものごとは、本質的に、その状況の個別具体性を基盤にして、多分に、対象となる人の個人固有性や主観に彩られている。したがって「接点」を深く探究するためには、その人の「生きられた時間」にしかと寄り添わねばならない。認知科学は、従来の研究方法論に縛られず、新しい方法論を開拓しながら進むべきであろう。

キーワード：接点、意味、生きられた時間、個人固有性、主観

1. はじめに

本論文で、「接点」とは、人と人、人と技術が交わる状況を意味する言葉として用いている。「接点」の研究は、認知科学ではかなり前から多くの人が手がけているよ！と違和感を抱く読者も多いかもしれない。そう、接点の研究はこれまでもたくさん存在していた。しかし、「接点」の扱われ方は、果たして満足いくものだったのだろうか？ 私はそう問いたいのである。

人が生きる上で、人と交わり、コミュニケーションが生まれ、互いに影響を受け、各々、自分なりに生きる意味を見出す。相手がしゃべったことや態度からどのような影響を受け、どんな意味の醸成につながったのか？ 意味の醸成には学びが必須だが、本人は何を学んだのだろうか？ 人と人の「接点」について明らかにしたいのは、そういう問いである。

新しい技術が世に導入されて、私たちの生の営みに変容を与えることは多々ある。人は技術をどう理解し、あるいは（完全に理解しないまでも）生活の中でどう受け入れるか？ その過程で生活習慣はどう変容したか？ 人はその技術の導入をどう感じているか？ 技術の導入が人の意識や行動や身体を変容させたのだと

したら、人は何を学び、何を捨てたのか？ 人と技術の「接点」について明らかにしたいのは、そういう問いである。

従来の研究は、必ずしも、そういうものごとを探究対象に据えてはこなかった。次章で論じるように、方法論的な縛りが、そういうものごとの探究を難しくしてきた。

コンピュータ・情報技術が生活のあらゆるシーンに導入されつつある現代においては、「接点」の問題がますます重要である。認知科学が、人がよりよく生きること（well-being）に資することを目論むものであるならば、まさに、「接点」の深い探究に乗り出すべきである。

2. 「接点」の研究のあるべき姿

2.1 「生きられた時間」に寄り添う

「接点」を、前節で論じたような濃密なものごとだと捉え直すならば、研究には何が必要であろうか？

事例として、自動運転を考えてみよう。2019年現在、自動運転技術は、「前後左右の車両制御に関わる運転操作の一部は自動化できる」レベル（レベル 2）にあるとされている。そして、近未来には、「限定された条件の下ですべての運転タスクを自動制御するが、緊急時などには運転者が運転を行う必要がある（したがって、運転者は運転席には座っていなければならない）」というレベル 3 の自動運転が可能になるとされている。レベル 3 の自動運転が生活に導入された時、人とシステムの間にはどのような「接点」が生じるだろうか？

運転席に座っているとはいえ、緊急時以外は運転を車に任せているとするならば、運転者は次第に、運転しているという主体的意識を失っていくであろう。主体的意識の欠如は、さらに、注意能力、運転操作能力、

危険察知能力など、数多くの能力の喪失をもたらすことが考えられる。

人は、時が経つにつれ、学んだり、何かを失ったりするものである。生活習慣を大きく変容させる技術が登場すると、なおさらそうである。ワープロが登場してから久しいのだが、多くの人たちがコンピュータがないと文章を書くこともできない。そして、漢字は、確実に書けなくなっている（もちろん、コンピュータがもたらす機能を駆使することで、新しい文章の書き方を得たというプラスの面もある）。コンピュータ技術が生活に導入されたことに起因して、文章の書き方が変わり、以前は必要だった何かしらの能力を失ったのである。

「接点」とは、このように、時の流れとともに変容する。したがって、人と技術の「接点」に関する研究を十全に遂行するには、「生きられた時間」に寄り添う必要がある。

これまでの研究では、人の意識や認知を調査する代表的な方法は、アンケートやインタビューであった。アンケートは言うまでもなく、単なる一回きりのインタビューは、その人の「生きられた時間」に寄り添うことができない。学びや失われた意識など、時とともに変容していく知の姿が重要であるにもかかわらず、一回きりのインタビューがそれを追うことは原理的に不可能である。アンケートは、研究者が項目を用意するという形式である以上、表層的なことは垣間見ることではできても、一人一人が「生きる」姿の深い部分に触れることは難しい。

認知科学は、「生きられた時間」に寄り添うために、どのようなデータをどう取得するのがよいのか？ 今こそ真剣に議論すべきであろう。

2.2 まずは、個人固有の知の姿を見出す

データの分析方法についても、よくよく吟味すべきである。たくさんの協力者から「生きる姿」についてのデータを取得したとしても、データを集計したり平均化したりした途端、各々の人の生き様や「生きられた時間」は、データの中に埋もれて見えなくなる。

「生きられた時間」や「生きる姿」とは、ジェローム・ブルナー[1]が復権の必要性を叫んできた「意味」の世界である。新しい人と出会って、心の中に新しい価値観が芽生えてくることも、自動運転という技術が生活に導入されたことによって新たなライフスタイルが生まれることも（あるいは、それまで重要視してい

た習慣や能力の喪失も）、「意味」の変容である。

「生きる」姿が、すなわち、意味の醸成や変容のありさまであるとする、人と人の「接点」、人と技術の「接点」を探究する研究においては、性急に普遍的な知見にたどり着こうと焦らない方がよい。まずは、個々の人生の（個人固有性にまみれた）「生きる」姿を描き出すことに精力を注ぐべきであろう。

集計や平均化という分析は、もともと、大量のデータの中に普遍性を見出すための下請け作業である。普遍性を見出すことを一旦封印するのであれば、そういう分析の発想も一旦棚上げした方がよい。そして、それぞれの人の「生きる」姿を色濃く描き出すために、どういう分析をして、どういう形式で研究成果を発表し、どういう態度で他者の研究成果を受け取るのがよいのかを、真剣に議論すべきであろう。

諏訪[2]や中島[3]は「一人称研究」という考え方を記した書[4]の中で、「物語的な評価」という考え方を述べている。ブルナーが提唱するフォークサイコロジー[1]の思想においても、「意味」の研究には「物語」という概念が鍵になると論じている。

2.3 主観の地位をあげよう

学会や研究会において、「研究という営みは客観性を有することが必須」という客観性信奉を基にした質疑応答に遭遇することは非常に多い。もちろん、研究対象や分野によっては、客観的なデータの採取がマストであろう。

しかし、「接点」の研究においては、客観的なデータだけで済むわけもない。人と人の接点、人と技術の接点で生じているものごとを探究するには、本人が何を感じ、考え、どのような感情を抱き、どういう意図で（近未来の）行動を御していこうとしているのかを問題にせねばなるまい。「生きる姿」は、本人が過去にどう生きてきたかという歴史の上に成り立つ現象なので、本人の主観抜きに探究しても無意味である。

したがって、接点の研究をする認知科学は、客観性を是とする方法論の縛りを解いて、今よりも、主観を重要視する方向に歩みだす必要がある。例えば、「からだメタ認知」[5]は、一人称視点の立ち位置から自身と世界の関わりを自覚しながら、そこで生じる思考や体感に留意を保ち、（曖昧でもよいので）言葉で表現するという手法であり、主観的認知のデータを得る一つの方策となる。元来言語化が難しい体感や知覚を言葉で表現しようと努力するからこそ、体感や環境への留意

が促され、自身と外界（他者、もの、技術）との接点のあり方を変容させる。つまり、この手法は、「接点」のあり方を変容させながら、その変容のありさまに知の姿を見出そうとする仮説生成型探究に適している。

3. まとめ

人と人の接点、人と技術の接点を深く探究するためには、人が他者や技術と交わる個別具体的なシーンを事例として取り上げ、過去、現在、そして未来にわたる「生きられた／生きられる」時間にしかと向き合いながら、個人固有性や主観を重要視したデータ取得と分析を行う必要がある。これからの認知科学は、そういう思想を礎にすることが肝要であろう。

参考文献

- [1] Bruner, J. (1990). *Acts of Meaning*. Harvard University Press, Cambridge, Massachusetts.
- [2] 諏訪正樹. (2015). 一人称研究だからこそ見出せる知の本質, in 諏訪正樹、堀浩一編 (人工知能学会監修) 『一人称研究のすすめ 知能研究の新しい潮流』 (第 1 章), pp.3-44. 近代科学社.
- [3] 中島秀之. (2015). 客観至上主義を疑ってみる, in 諏訪正樹、堀浩一編 (人工知能学会監修) 『一人称研究のすすめ 知能研究の新しい潮流』 (第 7 章), pp.171-202. 近代科学社.
- [4] 諏訪正樹、堀浩一編. (2015). 『一人称研究のすすめ 知能研究の新しい潮流』. 近代科学社.
- [5] 諏訪正樹. (2016). 『「こつ」と「スランプ」の研究 身体知の認知科学』. 講談社.